

夫婦パスタ日記

第3話『牛乳で作る濃厚カルボナーラ』

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

権 藤 浩 一（60） 洋菓子店『ヴェール』オーナー
権 藤 明 美（58） 浩一の妻、百貨店『山越屋』企画部課長

長 沢 唯（30） 洋菓子店『ヴェール』パティシエ

ニュース番組のアナウンサー

洋菓子店『ヴェール』のパティシエたち

百貨店『山越屋』の従業員たち

百貨店『山越屋』の客たち

1 洋菓子店『ヴェール』・全景（夜）

2 同・裏口

浩一が出てきて、鍵を閉める。

浩一（M）「今日も一日、終わった」

3 夜の道

浩一が歩いている。

浩一（N）「毎年バレンタインの時期は繁忙期で、店員たちと残業をした後、売上の計算などの事務仕事をしていると、帰宅時間も日付が変わる直前だった」

4 権藤家・全景（夜）

洋風建築の家が並ぶ住宅街の一角にある一軒家――

5 同・玄関

浩一が帰宅すると、靴を脱いでそのまま真っ暗な廊下を通り、リビングに入

る。

浩一（N）「建売住宅をローンで購入して、今は妻と二人暮らしだ。二人の息子は就職で県外に行ってしまい、どちらかが後を継いでパティシエとなってくれと期待していたが、その夢も呆気なく散った」

6 同・LDK

浩一が入ってくると、電気を点ける。テーブルには、伏せてある茶碗とお碗、ラップされた状態の白い陶器の皿に乗ったメンチカツ、同じくラップされた状態の小鉢に入ったひじきの煮物が置いてある——それらを見つめる浩一。浩一、メンチカツを電子レンジで温め、コンロの上に置かれた味噌汁を温め、炊飯器のご飯を茶碗によそう。

× × ×

浩一が遅い夕飯を食べている——テレビがついており、夜のニュース番組が

放送されている。

× × ×

インサート・テレビ画面。

アナウンサー「まだまだ寒い日が続きます。

厚手の服装でお出かけください。今晚はこの辺で」

× × ×

浩一、黙々と夕飯を食べている。

× × ×

浩一、ソファで横になり、そのまま目を瞑る。

タイトル——夫婦パスタ日記

第3 話『牛乳で作る濃厚カルボナーラ』

7 権藤家・全景（翌朝）

8 同・廊下

パジャマ姿の浩一の妻・明美（58）

が、階段を降りてくる。

9 同・LDK

明美が入ってくる――ソファで、浩一が横になって眠っている。

明美「あなた、起きて。風邪引くわよ」

浩一、ゆっくりと目を開けて、体を起こす。

浩一「あれ、もう朝か」

明美「昨日も遅かったんでしょ」

浩一「ああ。確か、十二時前だったかな」

明美「この時期はどうしたって忙しいからね

え（と台所へ向かい、味噌汁を温める）」

浩一（N）「明美と結婚して、もうすぐ三十年になる。取引先からの紹介で出会った俗に言う見合い結婚だった」

明美、冷蔵庫から卵を取り出すと、ボウルで卵を溶き始める。

浩一（N）「洋菓子店を営んではいるが、俺は和食好きで、朝食はご飯に味噌汁という

生活をずっと続けている。決して洋食が嫌いというわけではないが、日中洋菓子を作っているだけに、朝からパン食にする気分にはなれなかった」

明美、卵焼きを焼き始める。

浩一「風呂、まだお湯抜いてないか？」

明美「うん。追い焚きすれば、まだ入れるわよ」

浩一「分かった。ちょっと入ってくるわ」

明美「そのままお湯抜いて、浴槽洗つていて」

浩一「はいよ」

と、重々しくソファーから立ち上がり、出ていく。

10 同・風呂場→脱衣所

浩一、ボタンを押して追い焚きをする。

浩一、脱衣所の鏡に映る自分の姿を見る――髭に注目すると、髭の白さが目立っている。

浩一（M）「白いの、増えたな」

11 同・風呂場

浴槽に浸かって、目を瞑っている浩一。

浩一（N）「二十二歳の時に修業のために単身フランスへ行き、七年の修業の末に帰国した後もパティシエとして店舗勤務をした後、洋菓子店『ヴェール』をオープンさせたのは三十八歳の時だ」

12 洋菓子店『ヴェール』・店内（イメージ）

浩一がお菓子を作っている。

浩一（N）「地元ではすっかり定着し、気がつけばオープンから二十二年という歳月が流れていた。オープン当初に二人目が生まれ、あの頃はバタバタな日々だったと改めて思うが、まだ若かったこともあり、多少の無理ができた」

13 権藤家・風呂場

浴槽に浸かって、目を瞑っている浩一。

浩一（N）「しかし還暦になった今、身体と
いうのは正直で、多少の無理で身体が音を
上げる状態になっている。現に昨晚も、ち
よっとソファで横になったらそのまま寝
落ちしてしまった。睡眠を取ったからとい
って疲れが取れたかと思うと、全然取れて
いない。寝起きのせいということもあるの
か、まるでおもりを抱えているような感覚
だった」

浩一、ようやく目を開ける。

浩一「（呟いて）ちよっと休んだ方が良いか

……」

浩一（N）「洋菓子店を営む以上、繁忙期と
して仕事がたくさんあることはありがたい
ことであるが、何よりも体が資本の商売で
ある。十年以上勤めている社員もいてくれ
るが、『働き方改革』という言葉が浸透し
た今、自分の店、何より自分自身に『働き
方改革』が必要で、無理をしてまで働くの
は時代錯誤ではないかと俺は思い始めてい

た」

14 同・玄関

出かける支度をした浩一が、ドアを開ける。

浩一「じゃ、行ってくる」

と、リビングから明美の声がする。

明美の声「いってらっしゃい」

15 同・二階の夫婦の部屋

明美が化粧台の前に座って、化粧をしている。

明美（M）「ああ、すっかり目元や口元に皺が増えた……。この刻まれた皺を、何とか消そうと、私は毎朝必死だ。正直、いろんな化粧品を試してはいるが、これといって効果が出ていない」

16 百貨店『山越屋』・全景

市の中心部にある大手百貨店。

明美（N）「二歳上の夫との間に二人の息子を授かり、産休を取っていた時期もあったが、その期間を除き、私は高校卒業後から百貨店『山越屋』に勤めている」

17 同・企画部

明美がデスクに座って仕事をしている。
明美（N）「今は企画部の課長という管理職になったため、デスクワークが主になった。それでも接客のヘルプを任せられることもあり、夫同様、ファッションや見た目には比較的気を遣うほうだった」

18 同・催事コーナー

バレンタインイベントが開催されており、様々な店舗や製造メーカーのチョコレート菓子が販売されている――客で溢れかえっており、賑やかな状態である。

明美や企画部の部下たちが、行列の対

応や声をかけてくる客たちに対応をしている。

明美「いらっしやいませ。ごゆっくりご覧ください」

明美（N）「イベント催事担当が企画部ということもあり、私たち企画部も、接客用に出店先や販売部の品出しやレジ打ちは各出店先や販売部の従業員が担当しているが、オススメを尋ねられた時の客の対応や、行列ができた際の対応などが私たちの仕事だった」

× × ×

明美、全体の様子を見ながら歩いている——と、背後から男の声がある。

男の声「明美」

明美、気づいて振り返る——パティシエ姿の浩一である。

明美「あなた、どうしたの」

浩一「チョコレート納品に来たんだよ」

明美「結構人気あるわよ、あなたのお店の商

品」

と、陳列棚に並んでいる赤いパッケージの箱を、手に取る。

浩一「当たり前だろ、俺が作ってるんだからな」

明美「（苦笑して）少しは謙遜しなさいよ。それよりもさ、体、大丈夫？」

浩一「え？」

明美「今朝、結構疲れてたようだったから」

浩一「ああ、大丈夫だ。機械に頼らず、うちは全部手作業でやってるからな。どうしたって、バレンタインの時期は忙しくなっ、いくら時間があっても足りないぐらいだからな」

明美「忙しいのはありがたいことかもしれないけど、少しは休みなさいよ。今度の定休日、息抜きしたら？　あなた、何だかんだいつも事務作業とかしてて、休みっていう休みになってないと思うし」

浩一「常に仕事のこと考えちゃうんだよな。」

職業病というか、自分で自分の店を持つ責任だからな」

明美「今度の休みは、ちゃんと休んでよ。大事なイベント催事の時に体調崩したら、元も子もないんだからね」

浩一「はいはい」

明美「良いわね？」

浩一「ああ、分かったよ。じゃあな（と去っていく）」

明美（N）「夫の言い分は理解してるつもりだ。二人の息子を大学まで行かせることができたのは、私の給料だけでなく、自分の店を持った夫が安定した経営をしてくれてきたからだ。雑誌などのメディアにも取り上げられ、地元で夫はそれなりに有名人になっている。ある意味では、夫の顔そのものが看板になっており、私もその妻という扱いを受けることが職場でもあった」

明美、声をかけてきた客に対応をしていく。

明美（N）「バレンタイイベントに、夫の店も参加させてはどうかと提案してきたのは、企画部長を兼務する常務だった。公私混同になると、正直私は乗り気ではなかったが、夫は私の立場を考えて、企画に参加することになった。それだけに、私はバレンタイン企画に夫を巻き込んでしまったという責任があった」

19 同・搬入口

駐車してある軽バンに、浩一が乗り込む。

× × ×
（フラッシュ）

明美「今朝、結構疲れてたようだったから」

× × ×
浩一（M）「あいつには、何もかもお見通しなんだな」

浩一、軽バンのエンジンをかける。

浩一（N）「自分でも仕事を少し休もうと思

ついていたタイミングだっただけに、改めて妻の洞察力に感心した」

20 洋菓子店『ヴェール』・店内（夜）

閉店後——浩一と唯が後片付けをしている。

浩一「なあ、長沢」

唯「はい」

浩一「仕事の息抜きって、何やったら良いんだ」

唯「え、息抜きですか？」

浩一「年には勝てないんだろうな。最近、あまり無理ができなくなっただけ。今日、チョコの配達行った時に、嫁さんから休んで息抜きしたらって言われてさ」

唯「私の夫もそうなんです。個人事業主だから、無理しちゃうのも分かるんですけどね。私も最近、休むのも仕事のうちだよって言ってるようにしてるんです」

浩一「長沢は良い女房やってるんだな」

唯「まあ、夫とは保育園からの同級生で、友達みたいなものですから」

浩一「そうだったな」

唯「あ、息抜きだったら料理してみたらどうですか？　普段お菓子作ってるので、あえて違うものを作ってみるとか」

浩一「料理か……」

唯「私はこの間、ナポリタン作ってみたんです。料理動画のアプリ見ながらで、ちよつとアレンジも加えたんですけど」

浩一「ああ、パスタか。そういや最近、全然作ってないな」

唯「気分転換には良いと思いますよ」

浩一「ありがとう。ちよつと、パスタ作ってみるよ」

唯「奥様も喜ばれると思いますよ。オーナーが作るパスタなんて、絶対に美味しいに決まってるんですから」

浩一、冷蔵庫を開けると、牛乳パックが置いてあることに気がつく。

浩一「よし、決まった」

唯「何作るんですか？」

浩一「牛乳を使った、濃厚カルボナーラだ」

唯「オーナーが作るカルボナーラなら、絶対美味しいでしょうね」

浩一「俺はパティシエだ。普段牛乳や卵を使ってるからな。そういう材料を使ったパスタと言えば、カルボナーラしかないだろ」

浩一（N）「レシピ動画は見えていないが、長年食べ物を扱う仕事をしてきた勘が働くのか、何となく牛乳を使うカルボナーラのレシピが、脳裏でしっかりと整理されていた」

21 権藤家・全景（朝）

22 同・LDK

テーブルに向かい合って、朝食を食べている浩一と明美。

浩一「明日の昼、パスタ作ろうと思うんだ」

明美「急にどうしたの？」

浩一「息抜きしろって言ったのは明美だろ。」

だから、息抜きにパスタ作るんだよ。牛乳を使った、濃厚カルボナーラだ」

明美「へえ」

浩一「玉ねぎとベーコンってあるか？」

明美「玉ねぎは冷蔵庫に余ってる。新玉ねぎだけど。でも、ベーコンはないわよ」

浩一「じゃあ、今日買ってきてくれ」

明美「仕事終わりに、食料品売りのほうに行って、見てくるわ。ブロックタイプのベーコンで良い？」

浩一「ああ」

明美「分かった」

浩一「さて、まずは今日一日頑張るかな」

と、お碗の味噌汁を飲み干す。

23 洋菓子店『ヴェール』・店内

浩一、唯、その他パティシエたちが、お菓子作りをしている。

浩一「（唯に）予約のデコレーションケーキ、そろそろ支度するぞ。材料の準備できてるか」

唯「はい。もうすぐフルーツ切り終わります」

浩一「よし、やるか」

と、手慣れたように調理器具などの準備を進める。

24 百貨店『山越屋』・食料品売り場（夜）

仕事終わりの明美が、カートを引いて買い物をしている――精肉コーナーの前にやってきて、値引きシールの貼つてあるブロックタイプのベーコンを見つけると、

明美（M）「良かった、値引きしてる」

と、買い物カゴの中に入れる。

25 洋菓子店『ヴェール』・事務所（夜）

売上の計算など事務作業をしている浩一――時計を見ると、十一時を過ぎて

いる。

浩一、体を伸ばしてあくびをする。

浩一（M）「さて、帰るか」

26 権藤家・全景（翌朝）

27 同・二階の夫婦の部屋

それぞれのベッドで眠っている浩一と
明美——浩一、目を覚ますと、明美を
起こさないように、ゆつくりと立ち上
がり、忍び足で出ていく。

浩一（N）「火曜日は俺たち夫婦の休日だ。
しかし、休みとはいえ体内時計のリズムが
変わらないのか、いつものように六時過ぎ
には目が覚める」

28 同・LDK

コーヒーを飲みながら、新聞を広げて
いる浩一。

29 同・風呂場

明美が、スマホから流れている音楽に合わせて歌いながら、風呂掃除をしている。

30 同・LDK

明美の歌声が漏れてくる――浩一、声に気づいて振り向くと立ち上がり、台所に来る。

浩一（M）「さて、そろそろ作るか」

× × ×

以下、調理工程をカットバックで。

浩一、冷蔵庫の冷蔵室から値引きシールの貼ってあるブロックタイプのベール、野菜室から小ぶりの新玉ねぎを一つ取り出す。

浩一（N）「仕事柄、調理器具へのこだわりが強く、家で使うものとはいえ、有名な料亭の総料理長が監修した出刃包丁と木製のまな板を揃えた。パスタを盛り付ける皿は、

花柄模様をあしらった少し深さのある北欧製の陶器を使う。これは、妻の勤め先の催事で昔購入したものだ」

浩一、新玉ねぎを薄切りにする。

浩一（M）「新玉ねぎ一つは、まずは半分に切った後、薄切りにしていく」

× × ×

浩一、ベーコンの封を開け、小さめの拍子切りにする。

浩一（M）「百五十グラムと書かれたベーコンは、小さめの拍子切りにしていく」

× × ×

浩一、フライパンをコンロの上に乗せる。、オリーブオイルとベーコンをフライパンに乗せる。

浩一（M）「フライパンは、イタリアンレストランのシェフが監修したというステンレス製だ。……という話はさておき、オリーブオイル大さじ二杯と、拍子切りにしたベーコンをフライパンに入れて、弱火でじつ

くりと熱する」

× × ×

フライパンのベーコンが焼かれている。

浩一（M）「五分ほど経つとベーコンに火が通り、パチパチともジュージューとも聞こえる音を発し、焼ける香りが充満していく」

× × ×

フライパンの上でカリカリになったベーコン。

浩一（M）「さらに数分もすると、ベーコンがカリカリに焼きあがった」

浩一、新玉ねぎをフライパンの中に入れて炒める。

浩一（M）「そこへ薄切りにした新玉ねぎを加え、全体に火が通るまで炒めていく」

× × ×

フライパンの中の新玉ねぎが、しんなりしている。

浩一、二つの計量カップに入れた水と牛乳を順番にフライパンの中へ入れて

いく。

浩一（M）「玉ねぎに火が通ってしんなりとしたら、水四百五十ミリットルと牛乳三百ミリリットルをフライパンに流し込む」

浩一、塩とコンソメの素をフライパンに加える。

浩一（M）「そこへ塩少々とコンソメの素小さじ一杯を加えて、中火にする」

× × ×

フライパンの中が煮立って、ブクブクしている。

浩一（M）「しばらくすると、フライパンが煮立ってブクブクと沸騰する」

浩一、パスタをゆっくりねじりながら上から押さえつけるように、フライパンの中へ入れる。

浩一（M）「パスタ二百グラムを、ゆっくりとねじりながら上から押さえつけるようにして、フライパンの中へ沈めていく。水分の入ったパスタが少しずつ柔らかくなり、

やがて全てのパスタがフライパンの中に浸かっていった」

浩一、冷蔵庫に貼ってあるマグネットタイプのタイマーで、十分に設定する。

浩一（M）「パスタの入った袋には茹で時間が七分と表記してあった。ワンパン、つまり一つのフライパンで作るので、プラス三分の十分間、このまま煮込んでいく。フライパンの底が焦げないように、逐一混ぜ合わせていきながら」

× × ×

浩一、ボウルに二個を割り、粉チーズとブラックペッパーを入れ、泡立て器で混ぜ合わせる。

浩一（M）「パスタを煮込んでいる間に、卵液を作る。卵二個、そこに粉チーズ大さじ四杯、ブラックペッパー少々を入れ、泡立て器でしっかりと混ぜ合わせる。泡立て器は、言わば俺にとっての商売道具だ」

× × ×

十分後——フライパンの水分がほぼなくなっている。

浩一、コンロの火を止める。

浩一（M）「十分が経過し、パスタが煮込み終わったら、火を止めて一分待機する。すぐに卵液を流し込むと、余熱で卵が固まってしまうからだ」

× × ×

浩一、ゴムベラで卵液を流し込み、トングを使って素早く全体を混ぜ合わせ、時折フライパンを振る。

浩一（M）「ゴムベラを使って、煮込み終わったパスタの中に卵液を流し込み、トングを使って素早く全体を混ぜ合わせる。時折フライパンを振って、全体に卵液が絡むように調整する。卵液とパスタが絡むぺちゃぺちゃという小さい音が、フライパンの中で奏でられている」

× × ×

浩一、皿にパスタを盛り付け、ブラッ

クペッパーを振りかける。

浩一（M）「皿に盛り付けたら、ブラックペッパーを少し振りかける。これで、牛乳で作る濃厚カルボナーラの完成だ」

31 完成した『カルボナーラ』

浩一（M）「生クリームではなく牛乳を使用したけど、十分濃厚なカルボナーラとしてできあがっているだろう」

32 権藤家・LDK

浩一、パスタをテーブルへ運んでくる。

浩一「（廊下に向かって）おい、できたぞ」と、風呂場から流れていた音楽が止まり、明美の声がする。

明美の声「はい、今行く」

× × ×

浩一と明美が、それぞれパスタを食べている——浩一はフォーク、明美はフォークとスプーンを使っている。

明美「牛乳使わなくても、こんなに濃厚にカルボナーラってできるんだね」

浩一「だろ。濃厚なソースにしようとして、何でもかんでも生クリームを使うのは邪道なんだよ」

明美「それに、普段散々仕事で嫌ってほど生クリーム使ってるもんね。息抜きで作るパスタにまで、生クリーム使いたくないか」

浩一「それ言ったら、卵や牛乳のほうが使うこと多いぞ。それに今回は粉チーズ使ったが、普段クリームチーズだって山ほど使ってる」

明美「何だろ。あなたらしい感じがするわ、このカルボナーラ」

浩一「似たようなレシピは調べりや山ほど出てくるかもしれないけど、今回のパスタは特に参考にしたレシピはないぞ」

明美「そうなの？」

浩一「長年の感覚で、頭の中で思い浮かべて作っただよ」

明美「今度あの子たちが帰ってきたら、食べさせてやってよ。喜ぶと思うわよ」

浩一（N）「ふと、独立をした二人の息子のことが頭をよぎった。仕事と両立しながら何とか父親らしいことをしてきたつもりだったが、思春期真っ只中の時はほとんど口を聞かなかった、というより聞いてくれなかった」

パスタをじっと見つめている浩一。

浩一（N）「パスタを家族に振舞ったことも、ほとんどなかった気がする。家にパスタの麺があったのは、妻が時折作ることがあるからで、最後に自分でパスタを作ったのがいつなのか、記憶にないほどだ。目の前の妻が喜んでいいるならば、息子たちも喜んでくれるに違いない。おそらく次に家族が揃うのはお盆休みの時だろうが、その時にまたこの濃厚カルボナーラを家族に振舞おうと心に決めた」

明美「これは、私じゃ作れないわ。パティシ

エのあなただから、できたものよ。これから、また作ってもらおうかな。私、このカルボナーラ、ハマリそう」

浩一、ふと明美の皿を見ると、ほとんど食べ終わっていることに気がつく。

浩一「食うの早いな」

明美「そうかしら？　美味しいからペロツと食べれちゃったわ」

浩一「そんなに食いたいなら、またいつでも作ってやるさ。玉ねぎ、ベーコン、牛乳、卵、粉チーズさえあれば、何とかできるかな」

明美「じゃあ作ってほしい時には、あらかじめ材料用意しとくわね」

浩一「俺に作れるエネルギーが残ってる時にしてくれよ、今日みたいな時が良いや。（と思いついたように）あ、今度、明美にも何か作ってもらおうかな」

明美「え、パスタ？」

浩一「ああ。何か最近、明美のパスタも食べ

てないような気がしてさ」

明美「しよっちゅう作るようなものでもないしね。それに、どうもパスタって手が込んで、時間かかりそうな気がするし」

浩一「手間って言っても、このカルボナーラはフライパン一つで作ったし、特に何も難しい工程はないぞ」

明美「そりやあなたは普段から手の込んだスイーツたくさん作ってるから良いけど。でも、あなたがそう言うんだったら、私も今度何か作ってみようかな」

明美、頬杖をついてぼんやりと上を見つめる。

浩一（N）「自分の後のパスタは、変にハードルが上がってしまったかもしれないと、内心想ったが、それでも妻がどんなパスタを作ろうとしているのか、俺はワクワクする気持ちで待ち構えていた」

おわり